

考古学からみた古代王権の伊勢神宮奉祭試論

山中 章

はじめに

本稿のテーマは、伊勢神宮が天皇祖先神を奉祭する場として成立する時期を考古資料から探ることにある。

古代王権が祖先神を伊勢の地に誰がいつどのような歴史的背景で設置したかは、古代天皇制の実態を分析する上で欠かせない論点である。特に成立時期については文献史学からの研究が進められたにもかかわらず、『日本書紀』の記載をそのまま採用し、内宮が垂仁朝に成立したとする説に始まり、内宮、外宮雄略朝同時成立説や天武朝説まで実に多種・多様な議論が展開され、未だに明確な結論は見いだせていない。いずれの結論であるにしてもその対象時期は文献史料よりも考古資料の方が多彩な時期である。

ところがこれまで、考古学からこの問題に正面から議論する姿勢はあまりみられなかった。そうした中で八賀晋氏は、「神島神宝」の分析から画文帯神獸鏡の分布と伊勢神宮との関係を論じ、金子裕之氏は頭椎太刀や金属製紡織具等、神宝全体と神宮との関係を論じた[八賀晋 1997][金子裕之 2004・2005]。これら細部の議論を踏まえて伊勢神宮の成立を考古学的に正面から捉えたのが穂積裕昌氏である。

穂積氏の論証方法は後述するが、基本姿勢は論文の初めにも明記されているように「(文献史料の記載と)考古資料を照応させる」ことにある。文献研究成果を精査し、考古資料がどの時期の説に矛盾無く読み替えられるかという研究手法である。

これに対し本稿では、一旦文献史料の説く伊勢神宮成立の「歴史」から離れ、考古資料に限定して遺物や遺構から時期を特定し、大和王権の影が色濃く反映する資料(最も典型的表出するのは前方後円墳を中心とする古墳の築造状況やその副葬品)に焦点を当てて頭書の課題に迫ることとする。

封建的支配関係であった古墳時代において、大和王権(中央政権)が地方に進出するには大きな障害があった。これを克服するために採られた措置がミヤケ制、部民制、国造制であった。これらの諸制度が成立する時期についても文献史学を中心にして議論が展開されているところであるが、私も考古学の資料を基にその時期を検討したことがある[山中 章 2002a・2003]。拙論によれば、少なくとも伊勢湾西岸地域に於いて大和王権が直接的に地域へ進出する時期は6世紀前半以降であるとした。特に空間を占有し、王権の直轄的支配が及ぶのは6世紀後半以降であると考えた。

伊勢神宮内宮に奉祭されている天照大神がこの地に祀られるのはどれだけ早い説を採る研究者であっても3世紀を遡ることはない。では、4世紀以降に、在地首長層が支配していた伊勢の地に、大和王権が奉祭する神祀りの場を割譲することを求めたとなると、考古資料にはどのような変化が生ずるのであろうか。当然のことながらこのような事態が何の前触れもなく進行したとは考えにくく(もしその様なことが起これば戦争状態になるだろう)、

事前に、「大和王権を構成している有力首長と地方首長との人的な結合」が不可欠と考える。考古学からの従来の研究[都出比呂志 2005・広瀬和雄 2003]によれば、その可視的、具体的な象徴こそ前方後円墳だという。3 世紀以降に大和王権と地方との関係を探るに最も相応しいのが前方後円墳の配置と規模だと指摘するのである。前方後円墳こそ〈共通性と階層性を見せる墳墓〉だからである[広瀬和雄 2009]。そして、〈中央―地方の契機をもって、祭祀と政治を表出する墳墓が前方後円墳〉であるとするなら、伊勢度会の地にこそその痕跡がなければならないと考える。前方後円墳はいつ伊勢度会の地に出来たのか(出来なかったのか)、これこそ伊勢の地に王権奉祭の祖先神が置かれた時期を探る最も基礎的な材料ではなかろうか。

そこで本稿ではまず、伊勢地域を中心とした周辺地域への前方後円墳の展開状況を確認する。次いで、前方後円墳が〈共通性と階層性を見せる墳墓〉としての役割を失いつつあった 6 世紀後半以降については、横穴式石室(及びその副葬品)の導入状況について検証する。その上で、先学の対象とした諸考古資料について再度検討を加えながら頭書の課題に迫ろうと思う。このような検証により、自ずと従来考えられてきた伊勢神宮祭祀奉祭の歴史的背景も異なるものになると思われる。

I 古墳時代前期から中期の首長墳

本章では、律令制下に国とされた地域をそれぞれ伊賀(北部・中部・南部地域)・伊勢(北部・中部・南部地域)・志摩地域と呼称し、各地域の前方後円墳の時期別、小地域別築造状況を検証し、その展開状況を確認する。三地域はそれぞれ異なった展開を見せており、特に伊賀地域と伊勢地域では前方後円墳の連続性という点で大きな相違を見せ、志摩地域に至っては前方後円墳は後期に出現するのみで、前・中期には築造されなかった(註 1)という決定的な違いが認められる。まずその事実関係を確認しておこう。

[1] 伊賀地域の前方後円墳 (図 1)

伊賀地域は律令制下で阿拝郡と山田郡が置かれた北部と伊賀郡の所在した中部、名張郡の置かれた南部の三小地域に区別できる。北部・中部と南部では様相を異にしている。大規模な前方後円墳である石山古墳の築造以後、古墳時代後期に至るまで連続的に前方後円墳が築造され〈前方後円墳に媒介された政治秩序〉が一貫して維持される地域である。

(1) 伊賀地域北部

当該域は大和・山背を結ぶ陸路の通過する重要交通路に接した地域であり、阿拝郡域、山田郡域(律令制下の郡域をこのように標記する。以下同じ。)を合わせると、〈3 期〉(註 1)以降〈6 期〉を欠くがほぼ連続した前方後円墳の築造が認められる。舶載三角縁唐草紋帯二神二獣鏡などを副葬した山神寄建神社古墳の築造される 4 世紀中頃までには大和王権との深いつながりを持つ在地豪族が存在し、以後連続して関係を持続していた。

阿拝郡域では〈3 期〉に寺垣内古墳が設けられ、〈4 期〉に比較的規模の大きな荒木車塚古墳などの前方後円墳が築かれる。しかし後続する前方後円墳は〈8 期〉寺音寺古墳まで築造されず、後述する山田郡域とは大きく異なる。

山田郡域では〈3 期〉に山神寄建神社古墳が築造されると〈5 期〉には伊賀地域(伊勢・志摩地域を含めても)最大の御墓山古墳がほぼ連続して設けられ、後述する中部地域に引き

表 1 伊賀の古墳編年表

	阿 拝 地 域 (柘植川流域)	山 田 地 域 (服部川流域)	伊賀地域(長田川流域)			名 張 地 域 (名張川流域)
			上 流 域	比自岐川流域	中 流 域	
1 期						
2 期						
3 期	山神寄建神社 ●50	寺垣内●75				
4 期		荒木車塚●93	殿塚●88	石山●120		
5 期	御墓山●188		女良塚●100			
6 期			毘沙門塚●65			
7 期	鷺棚 1 号 ●59 外山 1 号 ●64	寺音寺●60	近代 ●30	王塚●48		
8 期	外山 3 号 ●45		馬塚●141		ぬか塚●37	
9 期	鷺棚 2 号 ●42 吉良土 ●50	新堂●40	鳴塚●37	貴人塚●55		琴平山●57
10 期	宮山 1 号●42 チョロ塚●25?					鹿高神社 1 号●42 春日宮山●34

●前方後円墳

図 1 伊賀の前方後円墳・首長級古墳の変遷 (『前方後円墳集成中部編』
(山川出版 1992 年より))

続き当該地域が大和王権との極めて深いつながりを持っていたことを示す。なお、当該地域では小規模であるが〈7～8 期〉に鷺棚一号・外山一号・外山三号が設けられた。

(2) 伊賀地域中部

〈4 期〉初めに全長 120m の石山古墳が築造されこれを契機に東方伊勢中部に抜ける交通路沿いに美旗古墳群(〈4 期〉殿塚→〈5 期〉女良塚→〈7 期〉毘沙門塚→〈8 期〉馬塚→〈9 期〉貴人塚)が形成され、連続的に 100m 前後の大規模な前方後円墳が築造される。特に石山古墳は同一墓坑内に 3 基の棺を有する得意な古墳で、〈4 期〉に典型的な石製模造品を大量に副葬する。墳丘及び後円部外に築造された造り出しなどから多種多様な器財形埴輪が検出され、器財形埴輪設置の意味を明示する古墳である。後述するように当古墳が伊勢地域中部に進出し、宝塚一号墳の築造に深く関与したものと推定されている。大和王権が律令期の「東海道」に進出する契機となった古墳と考えられる。

(3) 伊賀地域南部

律令国家では名張郡となる地域である。〈9 期〉に至るまで前方後円墳が築造されず、他の三郡域とは明らかに様相を異にしている。

この様に南部地域に前・中期の前方後円墳が皆無である点をどのように解釈すればいいのであろうか。伊賀地域で最も古い可能性の高い前方後円墳は山神寄建神社古墳である。伊賀盆地の北端付近の勢力に始めて前方後円墳を築造させた大和王権の目的は東進して伊勢北部に至るルートの確保であろう。後述するように伊勢北部地域はいち早く前方後円墳

表 1 伊勢の古墳編年表

	北 勢					南 勢				
	員 弁	鈴鹿川左岸	鈴鹿川右岸	奄 芸	安 濃	一 志	檜田川左岸	檜田川右岸	度 会	
1 期										
2 期	高塚山 1 号 ●50 麻積塚 1 号 ■43			赤郷 1 号 ※		庵ノ門 1 号 ■36 西山 1 号 ■44 簡野 1 号 ■40 鎗山 ■47 向山 ■71	高田 2 号 ○27 坊山 1 号 ○35 清生茶臼山 ○55 久保 ○52			
3 期	志氏神社 ●?	能褒野王塚 ●90			池の谷 ●86					
4 期	広B 1 号 □31 浄ヶ坊 ○36	寺田山 1 号 ●70	愛宕山 1 号 ●66		明合□60	西野 3 号□47	宝塚 1 号 ●95			
5 期		八幡塚 ○40				片野池 2 号 ○35	深長○50	権現山 2 号 □39×46		
6 期		白鳥塚 1 号 ○60×78		茶臼山 1 号 ○53			宝塚 2 号 ○60	高塚 1 号 ●75		
7 期							高地蔵 1 号 ○48	神前山 1 号 ○31 大塚 1 号 ○44		
8 期		城山●40 富士山10号●21	木ノ下●31 山下●39	西高山 2 号●26 経塚●40	鎌切 1 号 ●53		田村 7 号 ●39	斎宮池12号●33 ゆふみ 2 号●45	野田●34	
9 期		井尻●54 井田川茶臼山●?	西ノ野王塚●63 保子里 1 号○20?		おこし●40 鎌切 3 号●38	天保 1 号○20 西野 5 号○20?				
10 期									明星 7 号●15	

●前方後円墳 ■前方後方墳 ○円墳 □方墳 ※墳形不明

図 2 伊勢の前方後円墳・首長級古墳の変遷 (『前方後円墳集成中部編』
(山川出版 1992 年より))

を受容している。では中央部の伊賀郡域に石山古墳を設けた目的は何であろうか。伊賀地域全体の管理あるいはそのまま東進して雲出川沿いに伊勢に至るルートの確保ではなかろうか。同様の論理からすれば、伊賀南部地域に前方後円墳を設けた大きな目的は後の伊勢本街道に沿って伊勢南部地域に至るルートの確保だっただろう。既に述べたことがあるとおり、このルートは「伊勢神宮」への最短ルートである [山中章 2009]。にもかかわらずこのルートが確保され、大和王権と深いつながりのある在地豪族が管理し始めるのは 6 世紀後半以降のことである。伊勢神宮との関係を考える上で刮目すべき事実である。

〔2〕 伊勢・志摩地域の前方後円墳 (図 2)

本稿では、桑名郡・員弁郡以南奄芸郡までを北部(北勢)地域、安濃郡・一志郡・飯野郡域を中部(中勢)地域、飯高郡・多気郡・度会郡域を南部(南勢)地域と伊勢地域を 3 小域に分けて分析する。言うまでもなく伊勢神宮は南勢地域・度会郡域に位置している。

(1) 北部 (北勢) 地域

伊勢地域最古の前方後円墳の所在する空間である。〈2期〉の段階で早くも高塚山古墳が築造され、続いて〈3期〉に志豆神社古墳が海岸部に、能褒野王塚古墳が内陸部に相次いで設けられる。〈4期〉に寺田山一号墳・愛宕山一号墳が受けられるものの〈8期〉まで前方後円墳は断絶する。〈3期〉に90mの規模の大きな能褒野王塚古墳が築造されて中央との関係が安定するかに見えるが、〈5期〉以降〈7期〉まで当該地域においては前方後円墳が築造されることはない。他の伊勢地域においても〈5期〉〈6期〉の前方後円墳が見当たらない点は注意しなければならない。

〈5期〉は中勢地域に宝塚一・二号墳が築造された直後の時期である。宝塚二号墳が帆立貝式のような矮小化した前方後円墳になった後、当該地域からは前方後円墳が姿を消す。この事実と照応しており、中央との間に何らかの問題が生じた可能性がある。

(2) 中部(中勢)地域

〈3期〉に池の谷古墳が築造されるまで、中・南部に築造される古墳は一志郡域を中心とした前方後方墳であり、その後も大型円墳がこれに次ぐ。伊勢北部地域や伊賀地域とは全く異なった様相を呈している。穂積氏はこれら前方後方墳や円墳に副葬される銅鏡や腕輪形石製品・儀仗形石製品をもってヤマト王権との関係を示唆するが、根拠は明確ではない。当該地域が弥生時代末から古墳時代初頭にかけてS字甕やパレストイル壺、ひさご壺など、特異な装飾付き土器の盛行する地域である点は刮目すべきであろう。

池の谷古墳に連続して〈4期〉はじめに全長111mの伊勢地域最大の宝塚一号墳が築造される。近年実施された墳丘部分の発掘調査により、くびれ部北側に陸橋で接続した造り出し部を持ち、石山古墳と酷似した器財形埴輪で装飾されている。特に全長140cmの船形埴輪は全国に類例を見ない荘厳なもので、船の舳先に大刀、艫に蓋のミニチュア威儀具を配する。ただし、使用されている円筒埴輪は製作技法が稚拙で、胎土、寸法も一定しない。複数の埴輪製作未経験者がそれぞれの場で製作したものと理解できる。

高度な器財形埴輪を有し、造り出しを伴うなど、最先端の古墳築造技術を継承しながら、古墳構成の基礎的資材の製作技術は極めて稚拙である。宝塚一号墳の被葬者像を分析する上で大いに参考になる。埴輪で装飾した前方後円墳の築造という〈4期〉の首長墓では当たり前の要素が、宝塚一号墳の築造者にはなかなか困難課題であった事が推測できる。

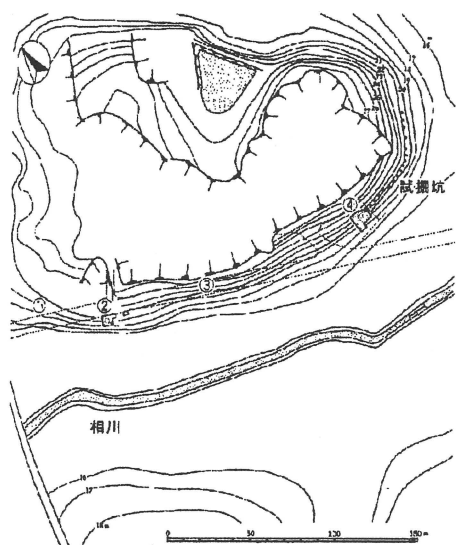
続く二号墳はさらに矮小化し、帆立貝式に近似する前方後円墳になってしまう。宝塚古墳群の全容が不明なため確証はないが、この後、前方後円墳はこの地域から姿を消し、〈8期〉の鎌切一号墳や〈9期〉かと思われる田村7号墳まで築造されない。中勢の中央との関係は前方後円墳の消長に焦点を当てると必ずしも安定的なものではなかったと言えよう。

(3) 南部(南勢)・志摩地域

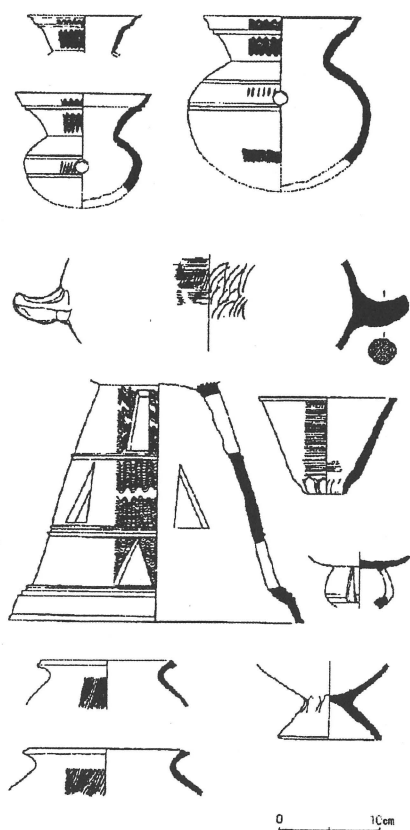
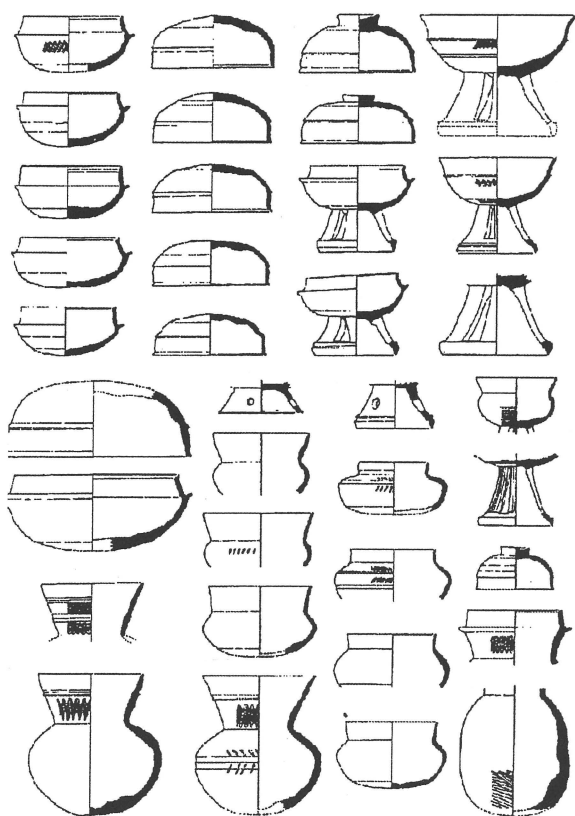
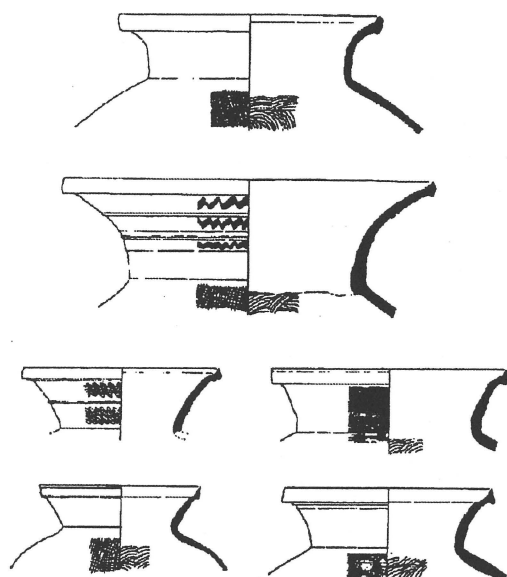
南勢地域では〈5期〉に方墳である権現山二号が築造されるのがめばしい古墳の始まりであり、その後も、〈6期〉に帆立貝式の高塚一号が築かれるものの、古墳時代を通じて前方後円墳はもちろんのこと、際だった首長墳すら築造されない地域である。

同様のことは志摩地域においても認められ、〈7期〉に志嶋11号墳が設けられるものの、古墳が一般化するのとは、〈10期〉以降の群集墳の時代になってからである。少なくとも前方後円墳の盛行する〈8期〉までは当該地域は中央とは疎遠な地域であったといえる。

当該地域こそ伊勢神宮が所在する地域であるが、6世紀中頃まで、古墳が媒介とする政治秩序とは無縁の地域であった。

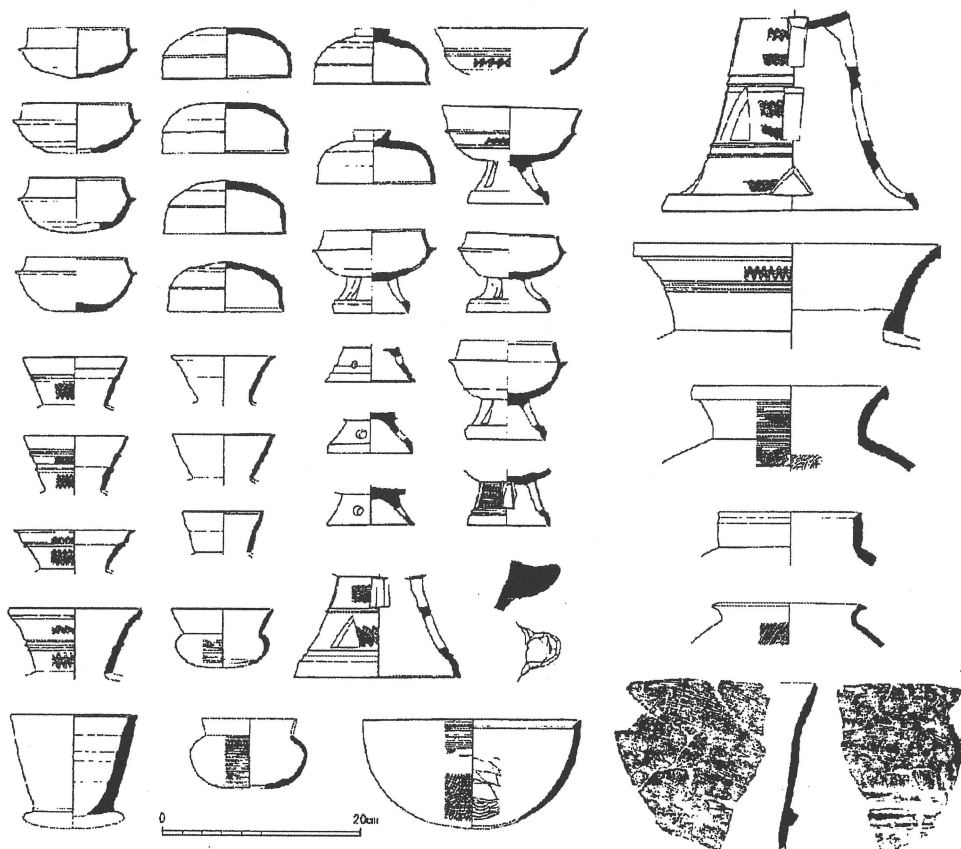


窯跡配置図 (1/3,500) ①~④は1~4号窯に対応



53-3 4号窯出土土器 (1/6)

図3 久居古窯址群4号窯出土須恵器実測図
(『三重県史資料編考古-1』三重県 2005年より)



2号窯出土土器 (1/8)

図4 久居古窯址群2号窯出土須恵器実測図
(『三重県史資料編考古・1』三重県 2005年より)

〔3〕 5世紀後半の古墳築造と窯業技術 (図3・4)

〈8期〉になると変化が認められる。伊賀・伊勢地域全体に小型前方後円墳の築造が急増するのである。伊賀では美旗古墳群に馬塚が、続いて〈9期〉に貴人塚が築造される。北勢では富士山10号墳・木ノ下古墳、中勢では鎌切一号墳、南勢では斎宮池1二号墳が築造される。伊賀から南勢地域北部にかけては再び埴輪を葺く小規模な前方後円墳の築造が始まるのである。大和王権との関係が再整備されたと考えた。

当該期の埴輪分析結果によると、伊賀を除く伊勢地域では全面的に淡輪技法を取り入れた新たな埴輪製作技法が採用される。伊勢地域にはこの頃から須恵器生産の開始と連動し、窖窯で焼成した須恵質の円筒埴輪が生産されるという〔中川千恵美 2002〕。大和王権との関係は当該期から前方後円墳の分布のみでは推し量れなくなるのである。穂積氏は久居古窯などの須恵器生産の展開を王権と南勢地域との関係の証左の一つとするが、当該期の須恵器及び須恵質円筒埴輪の展開状況は伊勢地域全体に及んだものであり、南部に偏っているわけではない。

中川氏の埴輪の分析によれば、当該期の埴輪は、各古墳ごとに製作者が異なり、それぞれ独自の埴輪製作集団を抱え、多元的に埴輪供給体制を構築していたという。興味深いのは、伊賀と伊勢では埴輪の製作技法や供給体制が全く異なるという指摘である〔中川千恵美 2002〕。伊賀地域の埴輪生産は伝統的な技法を踏襲し、埴輪樹立古墳も首長墓系列に限られる。これに対し、伊勢地域では全面的に淡輪技法を採用し、窖窯で焼成した須恵質の埴輪を樹立するというのである。先進的な伊勢と保守的な伊賀という新しい時代への対応の相違が認められる。この頃神島に画文帯神獣鏡が持ち込まれたとする〔八賀晋 1997〕。

Ⅱ 古墳時代後期の首長墳の変遷

伊勢地域におけるこうした大和王権との希薄な関係が激変するのが6世紀に成立した横穴式石室を伴う後期古墳の築造であった。伊賀・伊勢両地域における新たな王権との関係を準備した琴平山古墳と井田川茶臼山古墳に注目しながら、古墳時代後期の当該地域と王権との関係を探ってみる。

〔1〕 横穴式石室の導入

(1) 伊賀地域への導入

伊賀地域に初めて横穴式石室が築かれるのが琴平山古墳と丸尾山古墳である。伊賀盆地南西の入口に当たる名張地域に築かれた前方後円墳である。琴平山古墳は三基の横穴式石室を有し、MT15 型式の須恵器を出土する。金銅製馬具等典型的な後期初頭の有力古墳の副葬品を持つ。琴平山古墳所在地は大和から伊賀への出入り口にあたり、伊賀から伊勢に至る三方向の交通路の起点となる地域である。この他伊賀北部には〈9 期〉の鳴塚古墳、鷲棚二号、吉良土古墳、〈10 期〉の宮山一号墳・チョロ塚古墳などが知られる。

(2) 伊勢地域への導入

伊勢地域に初めて横穴式石室が築造されるのが北勢の井田川茶臼山古墳である。大和や近江から伊勢へ入る交通路(後の東海道)に面して築造され、律令国家三関の一つである鈴鹿関にも近い。墳形は不明であるが、おそらく前方後円墳であろう。金銅製馬具、金銅製広帯式冠、捻り環頭などの6世紀初頭の畿内周辺部の当該期古墳(物集女車塚や鴨稻荷山古墳)に副葬される副葬品と同じ構成を持ち、MT 15 型式の須恵器を多数副葬する。伊賀地域の琴平山古墳とほぼ同時期に築造されたもので、本古墳を要に北へは伊勢街道(北部:近世巡検街道。本稿ではこれを「不破道」と仮称する。)を経て美濃地域不破郡域へ、東北へは東海道を経て桑名へ、西へは東海道からそのまま海へ延びる街道を経て「大鹿ミヤケ」の港(天王遺跡)へ、南へは伊勢街道(南部)を通して中勢地域へ至るルートが展開する。

〔2〕 横穴式石室の展開

(1) 伊勢地域北部への展開と脚付短頸壺

6 世紀初頭に琴平山古墳、井田川茶臼山古墳の築造をもって始まる伊賀・伊勢地域の横穴式石室を伴う古墳は、6 世紀後半の〈10 期〉になると急激に各地域の隅々に展開し、安濃郡域に成立する長谷山古墳群のように600 基余の大群集墳をも成立させていく。しかし、一件特質の見分けにくい群集墳も、特定の副葬品などに着目すると一定のまとまりのある分布を確認することができる。既に指摘したことのある脚付短頸壺の分布はその典型的な事例の一つである〔山中 章 2002a・b〕。

宇賀新田古墳群はTK209型式～飛鳥Ⅰ期の須恵器を副葬する12基からなる小円墳群である。その中で古墳群の中心に位置する4号墳はTK209型式土器を副葬し、岸岡山古窯産の脚付短頸壺を供伴する。古墳群の所在地の直ぐ西には鈴鹿関と不破関を結ぶ「不破道」(仮称)が南北に走り、周辺には大安寺の墾田地であった宿野原や志礼石野が展開している。

この他にも〈10期〉の西野古墳群や東海道に接し、後の朝明駅家が設置された可能性が高い久留倍遺跡からも出土が知られる。

脚付短頸壺を副葬する群集墳はこの他にも点在し、大半が東海道及び「不破道」に沿って分布する。正知浦古墳・大岡寺古墳群・関台古墳・高岡山古墳・狐塚遺跡等がそれで、井田川茶臼山古墳から東に向かって東西～南北に直線上に展開する。脚付短頸壺の分布域と交通路が一致するのである。図5の通り、脚付短頸壺は後の河曲郡の先端部岸岡山古窯址群で生産され、海を越えて知多半島、渥美半島、三河地域中心部にまで分布している。いずれも後の官道や伝路、海路に沿って分布している点が刮目される。

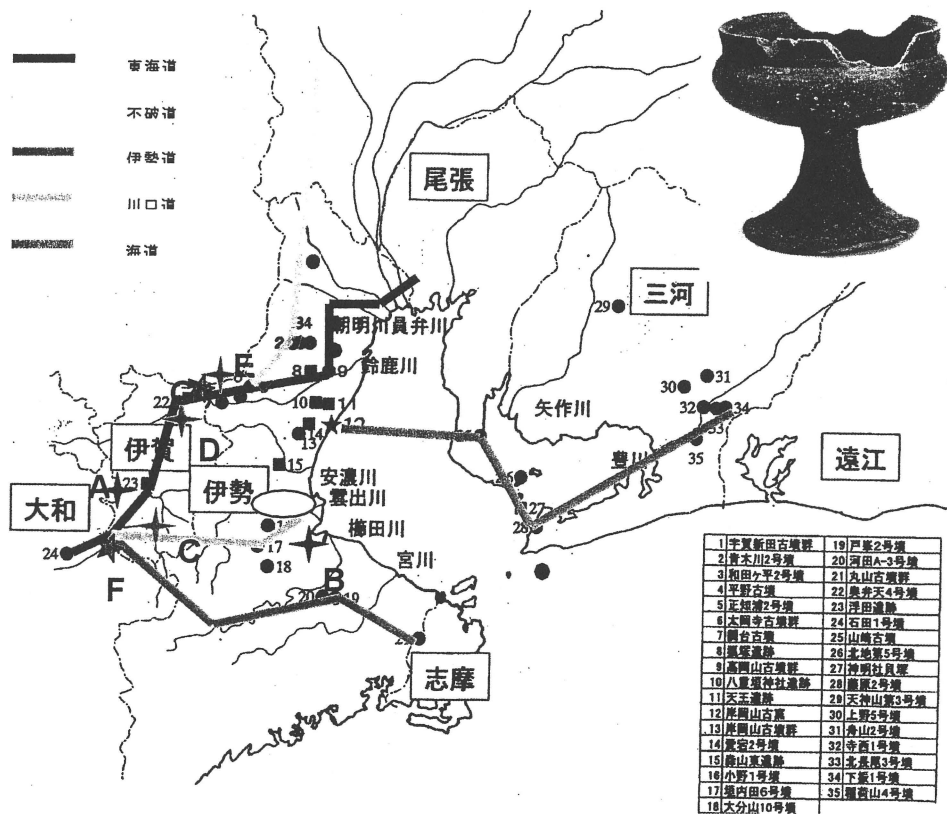


図5 伊賀・伊勢地域の前方向後円墳と脚付短頸壺の分布 (A 石山 B 宝塚 C 美旗 D 御墓山 E 能褒野 F 琴平山 G 井田川茶臼山)

○ 久居・藤湯土器生産

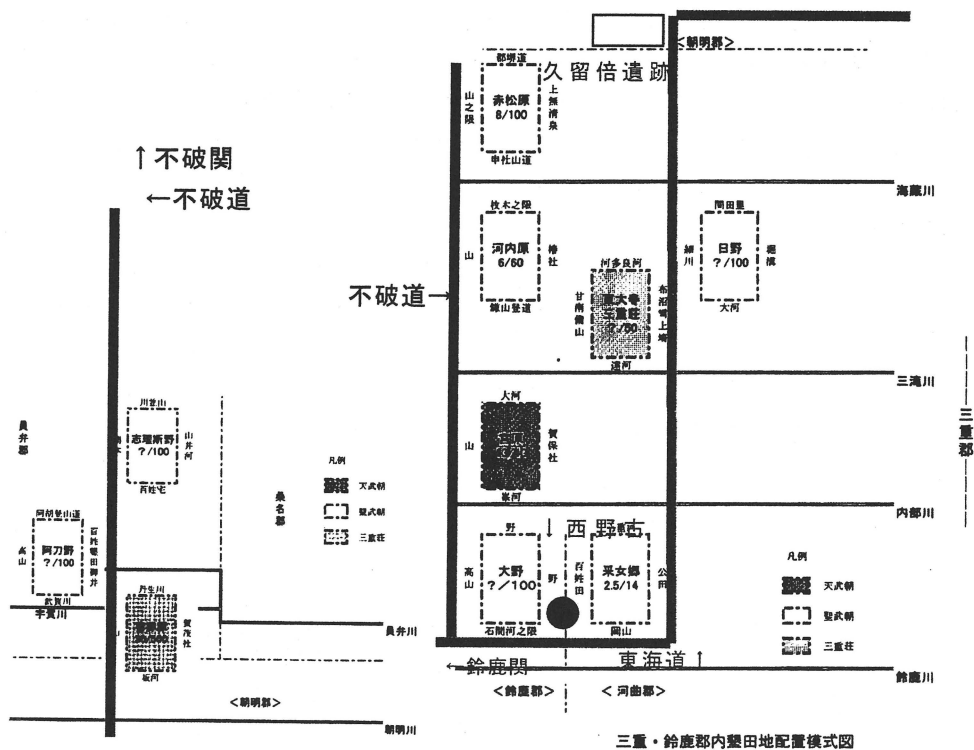


図6 『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』にみる墾田地の分布と官道

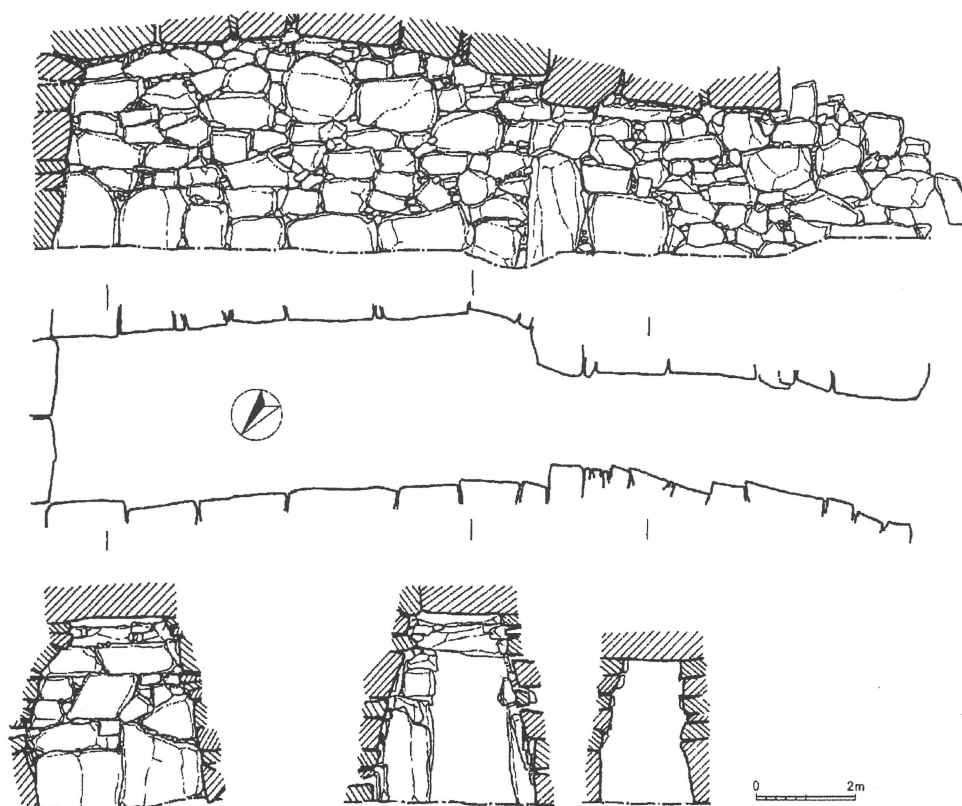
図6は天武朝と聖武朝に大安寺に施入された墾田地の分布と交通路との関係を示したものである。図から読み取れることは、大安寺という国家寺院の所領とされた王権管理の土地が先にみた交通路(東海道や「不破道」)に沿って展開することである。後期群集墳の中でも脚付短頸壺を副葬する古墳とも重なり、これら大安寺墾田地の成立背景には6世紀末に進められた交通要所を直轄地化する政策が反映したと解釈している[山中 2002a]。

伊賀・伊勢地域では、6世紀末から7世紀初頭にかけて大和王権との関係を示す新たな材料として脚付短頸壺の分布が有効と判明したのである。最早この時点で前方後円墳が媒介する政治秩序ではなくなっていた。広瀬和雄氏は「6世紀後半頃になると群集墳という形をとおして、地域首長の統治下にあった民衆にまで支配の網の目をかぶせようとしてくる。ただ、その場合でも各地の首長墓と群集墳のイデオロギー的一体性をみると、地方首長と民衆との間に形成された支配-被支配の関係には、大和王権は関与していないようにも見える。」(前掲[広瀬 2009] 114 頁)と指摘するが、「群集墳のイデオロギー的一体性」については、既に前方後円墳ほどの強さを失っていたのではなかろうか。

(2) 伊勢地域北部への展開と高倉山古墳の築造

伊勢地域南部への展開の中で最も注目されるのが〈10期〉に築造された両袖式の巨石横穴式石室をもつ高倉山古墳である。

高倉山古墳は6世紀末に築造された伊勢地域最大の横穴式石室を持ち、直径40m以上の円墳である。横穴式石室の軸線は北東-南西を向く。石室は早くに盗掘を受け、大半の

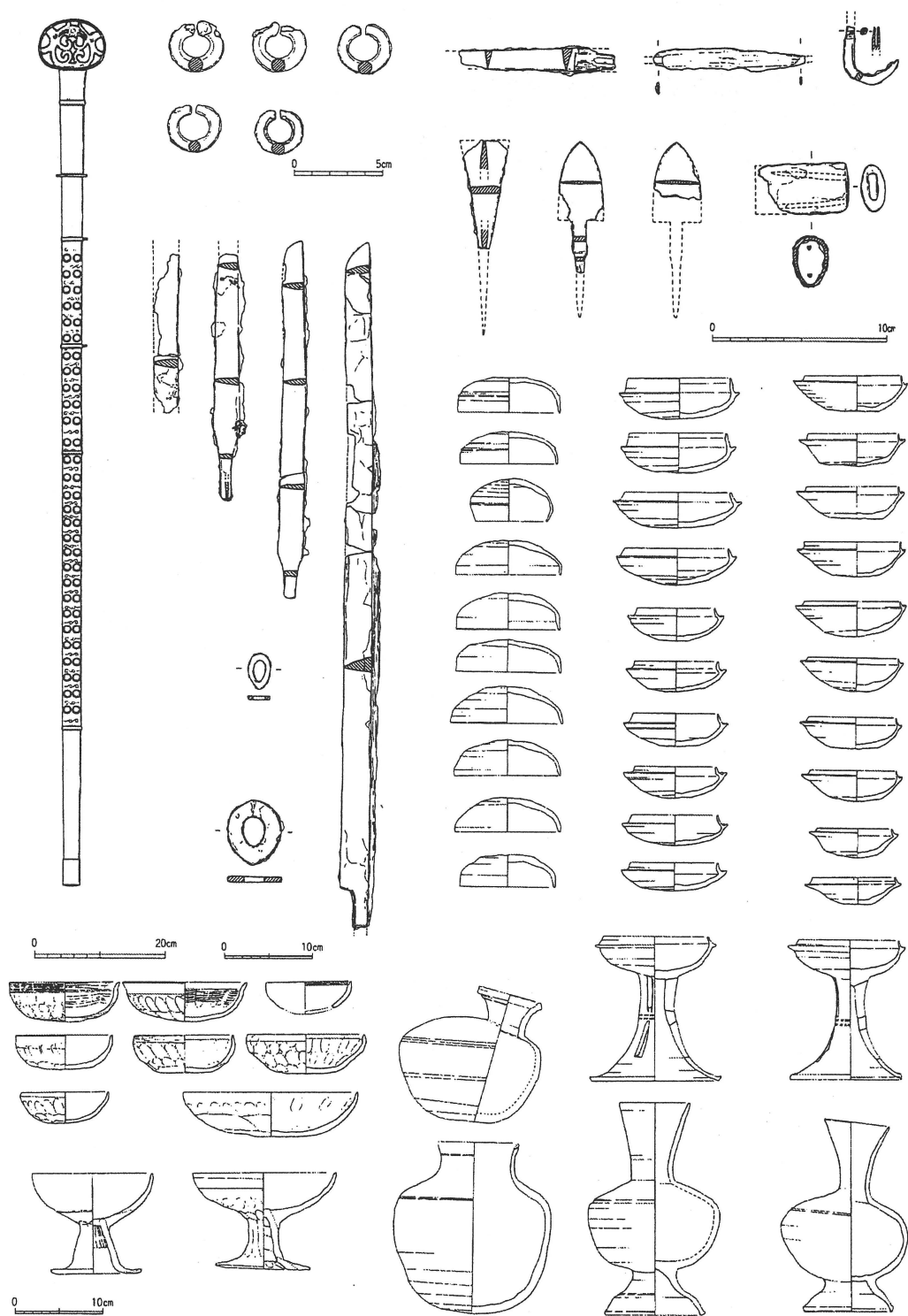


石室実測図 (1/120)

図6 高倉山古墳石室実測図(『三重県史資料編考古・1』三重県 2005年より)

副葬品が失われていたが、須恵器、土師器、金環、水晶製三輪玉、切小玉、ガラス製小玉、玉、勾玉、白玉、轡、直刀などが出土している。過去に多くの研究者が高倉山古墳と伊勢神宮(外宮)との関係を指摘してきた。穂積氏も市街地化の進む外宮周辺に車塚古墳や塚山古墳の存在を指摘した上で「外宮宮城内で古墳時代に遡る遺物の出土」しておらず、「内宮とは対照的なあり方を示している。」「高倉山古墳の出現は、まことに唐突な印象が強い」とする。高倉山古墳の出現が大和王権の伊勢地域進出の証左であるという。6世紀後半になってようやく伊勢神宮所在地の一角に強力な大和王権の痕跡が認められたのである。

なお、伊勢神宮に近い五十鈴川流域には横穴式木室をもつ昼河古墳群や南山古墳が知られる。横穴式木室の評価については未だに定説をみないが、火化を火葬との関係で捉えるならば伊勢神宮とは相容れないことになろう。この他に注目すべき後期古墳として双龍環頭大刀を副葬した磯浦古墳群の一つ宮山古墳がある。伊勢地域では一志郡鬼門塚古墳他中勢地域を中心に単龍環頭大刀が確認されている。双龍環頭大刀は他に朝明郡の死人谷横穴の例が知られ、いずれも7世紀前半のものである。単龍を物部氏、双龍を蘇我氏の配布品だとする見解[清水みき 1986]に従えば、当該地域は7世紀前後に蘇我氏との関係を深めたことになる。



宮山古墳出土遺物（環頭大刀：1/8、耳環・刀子等：1/3、刀・土器：1/6）

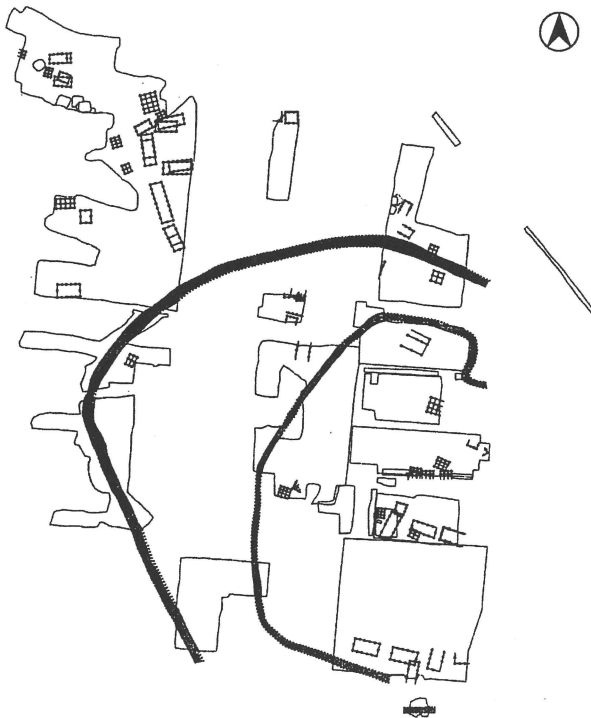
図7 宮山古墳出土品（『三重県史資料編考古・1』三重県 2005年より）

〔3〕 王権直轄地の展開過程

- ①天王遺跡
- ②天王屋敷遺跡
- ③金沢川遺跡
塚越古墳群
- ④岸岡山Ⅰ～Ⅲ遺跡
岸岡山古墳群
岸岡山2号窯
愛宕1・2号墳
- ⑤砂山遺跡
- ⑥原永遺跡
- ⑦南原永Ⅰ遺跡
- ⑧南原永Ⅱ遺跡
岸岡山1号窯
- ⑨山中遺跡
- ⑩土師南方遺跡
- ⑪中島遺跡
- ⑫双ツ塚遺跡
- ⑬双ツ塚西方遺跡
- ⑭深田遺跡



周辺遺跡地図 (1/25,000地形図「鈴鹿」)



天王遺跡遺構配置図(1:1,500)

ところで伊勢地域にはミヤケに附属した港湾と港湾に付随する物資集積の遺跡が発見されている。鈴鹿郡域の東側河曲郡を流れる金沢川が伊勢湾に注ぐ地点は潟地形を呈していた。その地から6世紀末から7世紀初めにかけての掘立柱建物群や須恵器峻別の遺構が発見された。天王遺跡である。須恵器は隣接する岸岡山古窯址群で生産された製品で、多くが焼け歪んでいた。掘立柱建物群は「コ」字形配置を採り、潟(津)を管理する公的な施設であった可能性がある。

既述の通り、脚付短頸壺は岸岡山古窯址群で生産されたものが伊勢湾を横断し、知多半島の先、山崎古墳や、比莫島の北地5号墳、渥美半島の藤原二号墳から出土するほか、東参河の中心部(豊国地域)の下振一号墳他多数から出土する。天王遺跡は伊勢湾内海交通路の拠点として機能したのではなかろうか。天王遺跡を中心にして伊勢湾を渡る海上交通路が形成されていたのである。

一方で脚付短頸壺は後に東海道と呼称される陸路を通じて伊勢地域全体→伊賀地域(柘植には奥弁天四号墳に入れられ、付近には柘植野原と呼称され、大安寺埴田地になった地域が展開する。さらに

図8 天王遺跡の位置と規模
([鈴鹿市考古博物館 2004] より)

大和へも分布したらしく、榛原には石田一号墳に副葬された。伊勢・伊賀全域が同一のシステムによって一元管理されたのである。天王遺跡こそ大和王権の直轄地ミヤケではなかろうか。河曲郡域には現在大鹿三宅神社が鎮座する。岡田登氏によって大鹿氏によるミヤケ管理の実体も推定されている〔岡田登 1995〕。6 世紀後半になって蘇我氏に権力が集中すると全国にミヤケ形成の動きが広まる。天王遺跡もそうした動向の中で、生産地に隣接して設置された須恵器積み出しの港として機能したのである。

ここでもまた、6 世紀後半に大和王権の積極的な地方介入の姿を確認することができたのである。伊勢神宮外宮の裏山に高倉山古墳が忽然と姿を現すのとほとんど時間差はなかった。

〔4〕 小結

主に古墳の築造経緯を通して伊勢神宮の地と大和王権との関係を明らかにしてきた。

その結果、6 世紀末に初めて、後に伊勢神宮の所在する伊勢地域南部をも含めた伊勢地域全体が大和王権による統一管理体制下に入ったと考えた。

穂積氏が検討材料とした頭椎大刀の伊勢湾での展開状況は神島や坂本 1 号墳に固有のものではない。全国的にも当該期に一定の政治システムに基づいて大和王権の一員である蘇我氏によって配布された剣とされ、伊勢の地に固有のものではない。むしろ大きな力を持った大和王権がそれまで関与してこなかった度会郡域に及んだことを示す初めての資料だったのである。

この時期こそ皇祖神天照大神をこの地に奉祭する絶好の機会であった。伊勢神宮成立の契機を 6 世紀後半に求める所以である。

6 世紀末の王権は、中国での祖廟の存在を知り、皇祖神の質を高める必要性に駆られた。また、6 世紀末は蘇我氏が物部氏を打倒し、強力な政権を構築する絶好の機会であった。遣隋使の派遣や官位十二階の制定など、中国に倣った新たな政策が次々と打ち出された時期でもあった。

Ⅲ 伊勢神宮をめぐる考古資料

最後にこれまでの研究で対象とされた伊勢神宮と関係するとされる考古資料について再検討しておこう。

〔1〕 神宮立地

穂積氏は現在の伊勢神宮内宮、とりわけ荒祭宮部分の立地が伊賀市所在の国史跡城之越遺跡のそれと比較し「古墳時代祭祀場の選地として典型的」とした。また、こうした空間が「汎国家的なレベルで決定されている可能性が高い」とする。国家権力が全国に祭祀場のモデルを示して形成させたというのであろうか。しかし、伊勢神宮の「大規模」祭祀空間が仮に城之越遺跡と同じ頃から、同じモデルでもって形成されていたとしても、それは伊勢神宮の地が祭祀空間であったことを示すだけで、水の祭祀空間である祭祀場と伊勢神宮のそれとを同一視することは難しいのではなかろうか。仮に地形的な共通性が認められるとしても、所詮それは伊勢神宮内宮の空間が伝統的在地豪速の祭祀空間であったに過ぎないともいえるのである。そもそも、伊勢神宮祭祀と城之越遺跡での祭祀が当初同じであったとするには相応の根拠が求められよう。むしろこうした前近代的祭祀を超越するもの

として天照大神が天皇祖先神として取り込まれたのではなかろうか。

〔2〕 神宮・神島神宝

多くの研究者が伊勢湾の先に浮かぶ神島の八代神社が所蔵する神宝（以下「神島神宝」という）と伊勢神宮神宝（以下「神宮神宝」という）との関係を指摘する。

例えば八賀晋氏は「神島神宝」に 1 面ある画文帯同向式神獸鏡が伊勢湾周辺だけでも合計 7 面集中する事実を指摘し、全国に 24 面ある同型鏡の 3 割近くが伊勢湾周辺にある事実に着目する。その上で、5 世紀後半から 6 世紀中頃までの大きな勢力による「配布」を想定し、「伊勢湾地域に特に多くみられる背景には、雄略朝にみられる朝鮮半島をめぐる国際情勢の変化や大王専制体制の強化のための国家的祭祀の場の必要性があったとする考えは魅力的である」と岡田精司の論を引いて伊勢神宮との関係を暗示する〔八賀晋 1997〕。

しかし、画文帯同向式神獸鏡の分布の中で伊勢神宮に最も近いのは多気郡明和町の神前山一号墳のみであり、「神島神宝」がこれに次ぐ。「配布」の時期も大きく 5 世紀後半と 6 世紀前半に別れ、時期不明の「神島神宝」を除けば同数ずつあることになる。全国 24 面ある内、5 世紀代のものは 15 面、6 世紀代のものは 6 面知られている（3 面は伝世品のため時期不明）。前者が雄略朝の「配布」とされるのに対し、後者は触れられていないが、敢えて言えば継体朝の「配布」となろうか。前者が九州から関東にまで広がっているのに対し、後者は三重県、愛知県、福井県と、東海・北陸に 4 面が集中する（他に群馬県と兵庫県がある）。いずれも継体王朝と深く繋がりのある地域である。「神島神宝」がいずれの時期か明確ではないが、後述する他の神宝が 6 世紀以降のものであるとされており、画文帯同向式神獸鏡が他の神宝と連続して納められたのであれば、当該時期にもたらされた可能性も十分あろう。琵琶湖、淀川、瀬戸内海と海上・水上交通の拠点に関連する古墳を多くもつ継体朝であるだけに、神島との関係は無視できない。

大和王権が伊賀・伊勢地域に〈4 期〉遺構再び大きな影響力を行使するのは既述の通り横穴式石室を導入する 6 世紀に入ってからである。神前山一号墳に何故 3 面もの画文帯同向式神獸鏡が入れられたのかは不明であるが、分布の広がりとしては「神島神宝」も井田川茶白山古墳への副葬と同じく 6 世紀代の「配布」に伴うものとした方が理解しやすい。

〔3〕 大規模土師器生産

高茶屋大垣内遺跡・北野遺跡等、雲出川河口部や櫛田川右岸域において遅くとも 6 世紀に開始される大規模な土師器生産窯が確認されており、之も伊勢神宮との関係で理解されることが多い。しかし、残念ながら、6 世紀以前の土師器焼成土壌で製作された土器の消費先が明確ではなく、即座に当該遺構の成立を神宮の成立と絡めることはできない。特に、5 世紀後半に遡る遺構は限られている点も問題であろう。

岡田登氏や穂積裕昌氏は、高茶屋大垣内遺跡周辺の地名である「藤方」と贄土師部との関係〔岡田登 1982〕からも土師器生産と大和王権との関係、そしてその延長上に伊勢神宮との関係を読み取ろうとするが土師器の供給関係はこれまた明確ではない。

6 世紀代の土師器生産窯が広範囲に多数発見される例は極めて稀で、その成立の要因に注目が集まるものの、当該期における古墳築造の再開も認められ、確証は得られていない。

〔4〕 須恵器生産技術

久居古窯の発見によって、5世紀後半に属すると考えられている TK23～47 型式の須恵器が伊勢国内(伊賀・志摩を含めて)において初めて確認された。土器の製作技法は大阪府堺市所在の陶邑古窯址群の同型式のものと多くの共通点を有しており、中央からの技術者の派遣が推定できる。

久居古窯の開窯とほぼ並行して奄芸郡域の稻生山窯跡群からも同型式の須恵器の出土が伝えられ、さらに近辺の徳居窯址群では後続する須恵器の生産が始まる。両窯の開窯を契機として伊勢地域内に一気に須恵器生産が展開するのである。朝鮮半島に由来する技術の伝承に王権が深く関与したことは十分に想定できる。しかし、既述の通り、小規模ではあるが前方後円墳の再築造という新たな契機がこれらの新しい技術の導入を促した可能性も高く、これもまた伊勢神宮の成立とは無関係であろう。

さらに伊勢神宮の所在する南勢地域や志摩地域に同様の生産施設は確認されておらず、中勢地域以北のこのような動向とは全く無縁といわざるを得ない。

〔5〕 伊勢神宮内宮採集の祭祀遺物

伊勢神宮内宮からは各種祭祀遺物が広範囲に出土する。この事実を捉えて穂積氏は内宮空間が5世紀代には大規模な祭場であったと推定する[穂積裕昌 2004]。しかし、既にみたとおり当該地域に当該期に大和王権との関係を最も端的に示す前方後円墳は一基も築造されておらず、大和王権との関係が希薄な中で「内宮」空間には大規模な祭場が展開していたと理解すべきであろう。とするとその利用者は在地首長層意外に考えられない。

おわりに

以上、限られた資料からではあるが、考古資料からみる限り、大和王権と伊勢南部地域が強く結ばれるのは、6世紀後半以降ということになる。穂積氏の分析では明確な結論は避けられているが、5世紀後半の「雄略朝」を画期と評価しているように読み取れる。また文献史学からの岡田精司氏の研究成果も雄略朝説だとし、これまた本稿とは意見を異にしている。

結論は異なるものの、様々な角度から多彩な研究者が、考古学の資料を用いて伊勢神宮成立について本格的な議論を展開することは無駄ではなかろう。日本史の大きな課題である天皇制成立の歴史的背景に迫るためにも、今後さらに資料を分析し、頭書の課題に迫っていきたく思う。

ところで、6世紀後半以降に成立したと推定した古代王権と伊勢神宮との関係だが、7世紀後半の天武朝には斎宮制度が確立し、持統朝には初めての式年遷宮が実施されるなど、国家祭祀としての神宮祭祀の基本形態が整うものと思われる。ではこの100年間はどのような状況であったのだろうか。大和王権が対外的な意義から伊勢神宮の地を確保したとされる中、制度確立までにどのような紆余曲折があったのだろうか。寡黙な考古資料からそれを解きほぐすにはこれまで全く手の付けられていない伊勢神宮そのものの発掘調査が不可欠であろう。数年前、出雲大社の境内地は文化財保護法に従って発掘調査され、その結果平安時代末の本殿が見事に発見され、当時の本殿の偉容が事実であると立証された。間もなく伊勢神宮は式年遷宮を迎える。歴史的遺産での建築工事は当然文化財保護法の規制下に

あるはずである。柱堀方の掘削工事では当然これまでの遷宮において行われたであろう祭祀に関する遺物が出土するはずである。国を挙げて対応すべきであろう。

補註

(註 1) 志嶋 11 号墳(おじょか古墳)は〈7 期〉に属し、前方後円墳の可能性があるとされるが根拠は明確ではない。

(註 2) 広瀬和雄他編『前方後円墳集成』(山川出版 年)で採用された時期区分。本書によればそれぞれ以下の通りである。

1 期：箸墓古墳。円筒埴輪なし。特殊機第形埴輪、特殊坪形埴輪。舶載鏡。 2 期：桜井茶白山古墳。円筒埴輪Ⅰ式。仿製三角縁神獣鏡。〈3 期〉：メスリ山古墳。円筒埴輪Ⅱ式。巴形銅器 〈4 期〉：佐紀陵山古墳・津堂城山古墳。円筒埴輪Ⅱ式。石製模造品。長方板革綴短甲。〈5 期〉：室大墓古墳。円筒埴輪Ⅲ式。滑石製農耕具・三角板革綴短甲。〈6 期〉：菅田山古墳。円筒埴輪Ⅳ式。TK73 型式須恵器。三角板鋳留短甲。〈7 期〉：大仙古墳。円筒埴輪Ⅳ式。TK216~208 型式須恵器。〈8 期〉：埼玉稻荷山古墳。円筒埴輪Ⅴ式。TK23・47 型式須恵器。〈9 期〉：市尾墓山古墳。円筒埴輪Ⅴ式。MT15・TK10 型式須恵器。単龍環頭大刀。〈10 期〉：烏土塚古墳。TK43・TK209 型式須恵器。頭椎大刀など。

参考文献

岡田登 1982 「三重県津市垂水発見の埴輪窯について－藤形の贅土師部との関連をめぐって－」(『皇學館論叢』第 15 巻第 2 号 1982 年)

岡田登 1995 「伊勢大賀氏について(上・下)」(『皇學館大学史料編纂所、史料 135・136 号』 1995 年)

金子裕之 2004 「三重県鳥羽八代神社の神宝」(『奈良文化財研究所紀要』2004 年)

金子裕之 2005 「三重県鳥羽八代神社の神宝 2」(『奈良文化財研究所紀要』2005 年)

河北秀実 1994 「西谷遺跡(枳ヶ池瓦窯) 逢鹿瀬廃寺・四神田廃寺採集瓦の同范関係と想定される供給パターン」三重歴史文化研究会『Mie history Vol 7』

川崎志乃「伊勢の古墳時代土師器生産・藤潟を取り巻く遺跡を中心に」(『Mie history 第 12 号』2001 年)

清水みき 1983 「湯舟坂 2 号墳出土環頭大刀の文献的考察」(久美浜町教育委員会『湯舟坂 2 号墳』)

鈴鹿市考古博物館 2004 『現地説明会資料 天王遺跡 13 次調査』(2004 年)

『前方後円墳集成中部編』(山川出版 1992 年)

都出比呂志 2005 『前方後円墳と社会』(塙書房 2005 年)

中川千恵美 2002 「伊賀・伊勢における埴輪製作集団の動向」(『三重大史学』第 2 号 2002 年)

八賀晋 1997 「伊勢湾沿岸における画文帯神獣鏡」(『三重県史研究』第 13 号 1997 年)

広瀬和雄『前方後円墳国家』(角川書店 2003 年)

広瀬和雄 2009 「古墳時代像再構築のための考察・前方後円墳時代は律令国家の前史か」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第 150 集 2009 年)

- 穂積裕昌 2004 「三重の祭祀遺跡－伊勢神宮への道－」(『第 12 回春日井シンポジウム資料集』春日井市教育委員会 2004 年)
- 穂積裕昌 2006 「海洋地域の社会と祭祀－海上交通と神島神宝をめぐる諸問題」(『季刊考古学』第 96 号 2006 年)
- 穂積裕昌 2008 「考古学から探る伊勢神宮の成立と発展」(『第 16 回春日井シンポジウム資料集』春日井市教育委員会 2008 年)
- 松阪市教育委員会 1998 『山添 2 号墳』
- 松阪市教育委員会 2005 『史跡宝塚古墳』
- 三重県 2005 『三重県史資料編考古-1』2005 年)
- 三重県 2008 『三重県史資料編考古-2』2008 年)
- 山中章 2002a 「伊勢国北部における大安寺墾田地成立の背景」(三重大学歴史研究会『ふびと』第 5 4 号)
- 山中章 2002b 「伊勢国飯野郡中村野大安寺領と東寺大国庄」(三重大学考古学・歴史研究室『三重大史学』第 2 号)
- 山中章 2003 「律令国家形成前段階研究の一視点一部民制の成立と参河湾三島の海部」(広瀬和雄・小路田泰直編『弥生時代千年の問い－古代観の大転換－』ゆまに書房)
- 山中章 2004 「伊勢国一志郡の形成過程」(藤田達生編『伊勢国司北畠氏の研究』吉川弘文館)
- 山中章 2008 「律令国家と海部－海浜部小国・人給制にみる日本古代律令支配の特質－」(広瀬和雄・仁藤敦史編『支配の古代史』青木書店)